

巻頭言

気象と私

気象予報士・環境防災総合政策研究機構 研究員

半井小絵

気象予報士として気象や防災に関わるようになって12年が経過しました。銀行に在職中に気象予報士の勉強をはじめ、2年がかりで資格をとり、転職をして民間気象会社で働きはじめたのが2001年でした。気象の先輩の方々からみると、まだまだ経験不足ですが干支をひとまわりしたと思うと感慨深いものがあります。

インタビューなどで「どうして気象予報士になったのですか？」という質問を受ける度に、私はいつも初心に立ち返ります。気象に興味を持つことに大きく影響を与えたのは私の祖母です。

子供時代の私のアルバムには、母が書いたメモが貼ってあります。「お空が泣いているの？と小絵が、雨が降り始めた空を眺めて言いました。」おばあちゃん子の私は、祖母とよく空を眺めていたのでしょう。天気が身近な存在として子供時代を過ごしました。

今年91歳になる祖母は1日をぼんやりと過ごすことが多くなり、最近はたまに会う私のことも忘れてしまうくらいになってしまいました。悲しく寂しい現実を受け入れるのに時間がかかりましたが、今は幸せに穏やかな生活を送ってくれたらと思っています。昨年、ある暖かい春の日に祖母の車いすを押して近くの神社まで行ったことがあります。その時、急にパラッと雨が降ってきました。雨かしら？というくらいの肌で感じるかどうかの小さな小さな雨粒でした。晴れているのに空から雨が降る現象を「お天気雨」、または「狐の嫁入り」と言います。雨を感じて祖母がポツリとつぶやきました。「あ、雨」、ほとんど自分から言葉を発しなくなってしまった祖母から久しぶりに聴いた言葉でした。

私の祖母は、昭和9（1934）年、京都で室戸台風の被害に遭いました。室戸台風は枕崎台風、伊勢湾台風と並び「昭和の三大台風」と言われ、室戸岬の観測値では911.6hPa（9月21日）を記録しました。極端に気圧が低く発達した台風で、西日本を中心に甚大な被害をもたらしました。

その日の朝、小学校に登校し朝礼を終え教室に戻った直後、猛烈な風とともに校舎が倒

壊し、祖母は崩れた校舎の下敷きになりました。その瞬間、友達21名の命が失われてしまいました。祖母は屋根の梁の間に挟まり、奇跡的に助かりましたが、衝撃的な経験をしたために天気にとっても敏感になり、天気予報がテレビで流れる時代になってからは、毎日、欠かさず予報を確認していました。台風が来ると、台風の行方が心配で中継を朝から晩まで観ていました。台風の眼に入ると風が弱まること、台風の位置により風向きが変わったり、雲の動きが早くなったりすることも祖母から習いました。

～初心忘るべからず～

祖母から毎日のように聴いた自然災害の恐ろしい経験の話は私の心の中にずっと残っています。私が気象に興味を持った頃を改めて思い出し、災害の多い日本で、これからも気象予報士として何ができるのかを考えているところです。

